

Arturo Benedetti Michelangeli
 Orchestre National de l'ORTF
 Sergiu Celibidache 1974.10.16 Live

AL TSA285

Altus

Beethoven
 Piano Concerto No.5 Emperor
 Tragische Ouvertüre
 Brahms

Arturo Benedetti Michelangeli
 Orchestre National de l'ORTF
 Sergiu Celibidache 1974.10.16 Live



ina

SAATCHI & SAATCHI

ブラームス
Johannes Brahms 1833 - 97

悲劇的序曲 Op. 81

1 Tragische Ouverture Op. 81 14:53

ベートーヴェン

Ludwig van Beethoven 1770 - 1827

ピアノ協奏曲第5番 変ホ長調『皇帝』Op. 73

Piano Concerto No. 5 in E-Flat Major, Op. 73, "Emperor"

1. Allegro 19:44

2. Adagio un poco mosso 7:27

3. Rondo 11:06

アルトゥーロ・ベネデッティ・ミケランジェリ (ピアノ)

Arturo Benedetti Michelangeli (piano)

Sergiu Celibidache (conductor)

セルジュ・チェリビダッケ (指揮)

Orchestre National de l'ORTF フランス国立放送管弦楽団

ミケランジェリ 皇帝を弾く

久保木 泰夫

フランス国立放送管弦楽団創立40周年特別記念コンサートの名譽あるソリストとしてアルトゥーロ・ベネデッティ・ミケランジェリが招聘された。同志セルジュ・チェリビダツケからの依頼である。チェリビダツケがミケランジェリについて「いかかなる世俗的な名声を排しても、疑いなく、ミケランジェリは、いまを生きる最高の芸術家である」(=...Michelangelo, qui est sans doute, je pense aujourd'hui, le meilleur artiste vivant)と語っている。その“最高の芸術家の証し”がシャンゼリゼ劇場に集まったパリの聴衆とORTFの電波を通じて全ラジオ聴取者へ披露されたのが初日となる1974年10月15日である。メトロのアルマ・マルソー駅で下車して一息に階段を駆け昇って外に出ると、そこから劇場へはほんの2〜3分だがすでに路上は異様な観衆の熱気に包まれていた。シャンゼリゼ劇場正面入口の扉には“Complet”(=満員御礼)の看板がなんとも堂々と誇らしげに掲げられている。

ふたりの巨匠の競演にさわめき沸く会場の一階オーケストラ席後方の貴賓席にはパリ在住の白髪のリビンシュタインもいる。私国家が推し進める文化政策の恩恵を受けて音楽に縁ある学生はガラコンサートを除き、すべての演奏会を5フラン(当時300円)という格安の学生席で聴くことができる。その席は天井桟敷という最上階の場合もあれば、さらにその上の回廊風のロー

ジュ(高音がかなりキツく反響する箇所で息苦しいこともある)で聴くこともあるが、時に空席があれば、例え最上席でもフロントが割り当てられる。あるいは幕間に移動することも当時は許されていた。しかしこの晩はそうしたもの天国に近い場所から離れた場所、即ち舞台に向かつて左側の2階に相当するブルミエ・バルコニー席2列目からのチケットを自ら手に入れたのだ。そこは斜め後方からミケランジェリの手と伸びた背中を見下ろす位置でピアノの動きもかなり鮮明に把握できるよいポジションである。チェリビダツケの長いタクトが振り下ろされると偉大な皇帝の馬車疾風の如く奔りだした。すぐさまミケランジェリの流星のような冒頭のパッサージュが弾かれると遠端にさわめき興奮していた物見高いパリの聴衆が一斉に椅子の席を座り直した。

この演奏には一切のコメメントや注釈は不要である。虚榮を廃し無心に聴くだけでよいのだ。全知性と全感覺を駆使して五感を機能させて聴けば聞くほど、その躍動する一音一音に、その流れ滴り落水する研ぎすまされた一粒一粒のキラムキで目が眩み身動きができなくなる。無限の存在を知らしめた宇宙創造の神の摂理に従順に、無垢で虚無な生命感を体現させてくれる17世紀のオランダの作曲家スウェーリンクのヴァージナルによるファンタジア・クロマティ

カヤトッカータの整然とした美しい裝飾音と新鮮な空気の流れを彷彿とさせるより古い時代様式の響きが未だ響いてくるのだ。古典派に属するベートーヴェンのコンチェルトにこうした古楽的な空気を秘めた打鍵技法を、機能的なモダン楽器であるスタインウェイで聞かせるのもミケランジェリならではの天資であろう。洗練として意気揚々としたミケランジェリの容姿から、フォルテでもフォルティッシモでもほとんど肩が拳がったりズレたり動いたりしない堅牢な姿勢から劇場全体に放たれるその零れ落ちるような輝かしいトリルや種めくアルペジオ、そして強靱でビューアなトゥッツィイ。ホロヴィッツの底が抜けるような無鉄砲な左手の強奏ではなく、リヒテルの短く突き刺さるような太い左手の恐ろしい重低音もない。すべての箇所においてこれ以上再現できないような絶妙なコントロール能力と抑制力ですでに悪魔的な完璧さへと到達し、その戯れと即興性から創造される跳発的で微妙な間の取り方と、狼々としかし淡々と歌う旋律の明晰さと疾風怒濤の世紀への忠誠心がわれわれのこころを奪う。

ミケランジェリには *piano* も *pianissimo* も必要ないのだ。美しくここに響くベートーヴェンの魂の旋律を全身全霊で弾くので *piano* でも *pianissimo* でもその立体的で清澄な響きから聴衆には *mezzoforte* か *forte* にも聞こえてくるの

だ。これはベニーヴェーゲンに限ったことではない。ショパンの第2ソナタの雑送行進曲のクライマックスとなる中間部の旋律がそれに当たることは云うまでもない。さらに繰り返しの記号のあるパッサージュはミケランジェリにとっちはもはや繰り返してではなく、古典的な様式に従順に、新たに進行する再現部であるから決して同じ表現に終始することはない。だからミケランジェリを聴かされるとかつて人念に培われた固定観念をも覆される。しかしそこに存在するのは驚きではなく感動なのだ。

クラヴサンという楽器でフランス音楽の精神性を普遍的なものにした恩人の言葉

*J'aimé beaucoup mieux ce qui me touche,
que ce qui me surprend. François Couperin*

「驚かされることより感動させられることを好む」 フランソワ・クーペラン

*

Théâtre des Champs-Élysées は 1913 年の開館以来パリのクラシック界を代表する殿堂に相應しく音響もパリでは一番優れている。ベルギーの建築家アンリ・ファン・デ・フェルデの素案を継承したオーギュスト・ペレの最終設計で当時としては初となる鉄筋コンクリートによるモダンなコンサートホールが誕生した。内装のデ

コールはルネ・ラリックや彫刻家アントワーズ・ブルデルのレリーフ、フランス象徴派でナビ派のモリス・ドゥニによる天井画などで装飾されている。1934 年創立のフランス放送管弦楽団は当初からシャンゼリセ劇場のレジデンスオーケストラである。

1974 年 10 月 15 日と 16 日の 2 晩に亘って催されたコンサートプログラムの冒頭にアラームスの「悲劇的序曲」を選んだのはその客員指揮者のチェリビダッケである。何故か？ チェリビダッケ曰く「アラームスの作品のなかでも最もフランス的な色彩と色調から、仄かなモクレンの光が冷たい朝霧を透して迎り一面に明るさを感じさせることができぬニュアンスをもった作品であることから、オーケストラのいま現在の管楽器や弦楽器セクションのバランスやサウンド創りという次元において必然的に音かんだ曲日である」と答えている。そして 18 世紀後半から 19 世紀に活躍した英国ロマン主義の風景画家ターナーの絵からも影響されたであろうアラームスが、今度はフランス印象派の画家たちへその陰影に富んだ音楽で影響と刺激を能えたことと推測されることから、「ドビュシーへの影響の継承も拭いきれないという好奇心もある」とチェリビダッケはインタビューで語っている。

チェリビダッケ (= 私語では発音のセオリーからせ

リビダッシュとも発音される) が 1964 年以後の名称であるフランス国立放送管弦楽団の首席客演指揮者として迎えられる、その凄まじい情熱で根源からオーケストラのトレーニングに専念したのは 1973 年から 1975 年の実質 3 年弱に過ぎないが、バリ管弦楽団と比べる種マイナーなイヌメーの放送管弦楽団を猛特訓によつて世界のトップクラスの實力にまで引上げたのである。チェリビダッケ曰く「フランスの音楽状況はヨーロッパのなかでも歓迎できざる状態ではないと言えるけれど、世界にはたくさん優秀な音楽家がいるが、驚くことにこれほど短期間で、これほどまでに輝かしい成果を上げられた演奏家たちはフランス以外には知らない。まさにすばらしく、ポジティブでエキサイティングだ」とラジオフランスのインタビューで語っている。

その衝撃的なデビューとなったのがベートーヴェンの第 7 である。膨大な時間をリハーサルに費やし、これが「あの ORTF オケなのか」と耳を疑いたくなるような荘厳さと迫力でその潜在的な力を存分に発揮させた名演を残してくれたのである。さらにヨハン・シュトラウスの「ウィーンの森の物語」におけるリハーサルでは、3 拍子の様なワルツをチェリビダッケ自らピアノを弾きながら、いつもの甲高い声で歌いながら足を鳴らしてリズムを取り、クララ・ハスキル風顔に戯けたり、レントラー風顔に再現し

て農民しか踊れない無骨な 3 拍子を弾きながら「オイラは…そのなんとかムッシュ・コルトットとか言われても知らねえしそんなんじや師れませんぜ…」とか発音も巻き舌で悪戯っぽく楽団員を説得しようとする役者チェリビダッケの最良のお手本となるワルツはアルフレッド・コルトーの弾くショパンのワルツ第 7 番嬰ハ短調作品 642 であった。そしてコルトー流のリズムのフィーリングを習得したオーケストラはスマートで優雅で洗練させた透明感のある音色で、心地よく持続する長いクー・ダルジェ (ポーン・グ) を見事に活かしたよく歌う円舞曲を聴かせてくれた。また 1975 年 8 月にはアンリ・デュティユーの「メタボール」 (= "Les Métaboles") の難解で曖昧な不規則な変拍子のリズム表現を克服したオーケストラはあまた古典の名曲のよ様な存在で仕上げた感動をもたらし。さらに次々と新鮮な発見や驚きを France Musique のラジオ聴取者や聴衆に提供してくれながら、日々の練習が過酷であることやレコード録音を許可しないなどオケの組合側と軋轢を生むこととなり、ストライキ大団フランスならではの内紛が勃発し、結果的に 1975 年には音楽監督の地位にあったチェリビダッケが退くというパリのメロマンにどつても、創立当初の 90 名から 200 名にまでに増員された楽団員にとつても悲劇的な結末を迎えるのである。

アルトウーロ・ベネデッティ・ミケランジェ

リをライヴで聴いたのはリヒテル主宰のトゥ
レース音楽祭グランジュ・ドゥ・メレGrange
de Meslayでの1974年と1975年の二晩——な
ぜか会期中のすべてのリサイタルでリヒテル
とミケランジェリだけが21時間演奏ではなく20
時30分から開始されている——パリのサル・
ガヴオーヌSalle GAVEAUとサル・ブレイレル
Salle PLEYELでそれぞれ一晩、そしてシヤン
ゼリゼでの今回のコンチエルトのタタベの5回で
ある。いまとなつてはそれぞれが濃密でスリリ
ングなミケランジェリ体験であったが、秘密結
社でもある誇大妄想狂教団から授けられる音の名
誉を一瞬で剥奪されるかの如く、鮮明で強烈な
高音質のINAのオリジナル音源を聴かされて
灰色の脳細胞がすっかり覚醒してしまつた。フ
ランス放送協会屈指の録音技師ジャン・ポール・
クレア氏とプロデュースのジャン・ジャック・ボ
ワガレ氏に賛美と敬意を表したい。さらにこの
宝石に特殊な手法で魔法をかけたアルトゥスの
斎藤啓介氏の貢献も賞賛したい。最上のミケラ
ンジェリサウンドのスタインウエイを、その精
神的にも肉体的にもその絶頂期に聴くことがで
きるまさにこのマスター音源こそが“最高の芸
術家の証し”の痕跡なのである。

TEXT©2013 YASUO KUBOKI

アルトゥーロ・ベネデッティ・ミケランジェリ Arturo Benedetti Michelangeli 1920-1995

1920年1月5日北イタリア・ブレシニア生
まれ。1995年6月12日に没する。父は弁護士
でピアノ教師の資格を持っていた。3歳から
ヴァイオリンを始め、4歳からピアノも始めた。
1939年第1回ジュネーブ国際ピアノ・コンクニ
ルで第1位優勝。その後アルフレッド・コルトー
に激賞され、最初の輝かしい名声を得る。第2
次世界大戦中はイタリア空軍パイロットとして
活躍。後にミケランジェリは「飛ぶこと(飛行
機)、走ること(自動車)は命をかける価値がある」
と語り、大のスピード狂ぶりであり、来日時の
愛車は赤のフェラーリであり、200キロ程度で
走行するとの話であったようだ。戦後すぐに演
奏活動を再開するや瞬く間に世界的名声を獲得
し、完全主義者として数々の伝説を生んだ。ピ
アノを徹底的に吟味することを知られ、キャン
セルも多く、生演奏を聴けた人は幸福である。

セルジュ・チェリビダツケ Sergiu Celibidache 1912-1996

1912年6月11日ルーマニアに生まれる。ブカ
レストで音楽、哲学、数学を学んだあと、29歳で
音楽を学ぶためにドイツに移住。1936年、作曲家
のハインツ・テイデセンを頼ってベルリンに移り、
ベルリン芸術大学で音楽を学ぶがかわら、ベルリ
ン大学で哲学を専攻する。ジョスカン・デ・プレ
の論文で博士号を取得したほか、作曲作品も残し
ている。

在学中、フルトヴェングラーの指揮するベルリ
ン・フィルのリハーサルやコンサートに通い、強

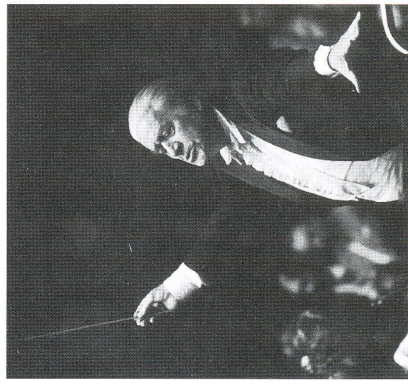
い影響を受ける。その後、フルトヴェングラー
が「非ナチ化」裁判で演奏を禁じられていたため
に、ベルリン・フィルはチェリビダツケにその役
を託した。1945年8月29日に初めてベルリン・
フィルの指揮台に立ったチェリビダツケは華々し
い成功を収め、翌1946年2月から正式にベルリン
・フィルの指揮者となり、1954年までの間に414
回の演奏会を指揮する。1946年12月21日にペル
リン・フィルがシヨスタク・コーヴェイナの交響曲第7
番を初めて演奏した際、ロシアのレコード会社が
その演奏会を収録していたが、チェリビダツケは
そのレコーディングに満足せず、以来自身のコン
サートの録音を禁ずることになる。1947年5月24
日にフルトヴェングラーがベルリン・フィルに復
帰、54年までの間、二人で演奏旅行を振り分ける。
1954年11月28日、R.F.A.の功労賞を受けたのを
記念して翌29日に行われた演奏会がチェリビダツ
ケとペルリン・フィルの最後の演奏会になった。
11月30日にフルトヴェングラーが世を去り、12
月13日にカラヤンが新しい指揮者になると、彼は
ベルリンを去ったからだ。

1953年から67年の間、チェリビダツケは、ス
カラ管弦楽団、聖チェチーリア音楽院管弦楽団、
ローマ放送管弦楽団などイタリアのオーケストラ
を積極的に指揮する。1960年から63年まではコ
ペンハーゲンの王立管弦楽団も頻繁に指揮してい
る。

1963年から71年まではスウェーデン放送管弦
楽団と密接な関係にあり、多くのリハーサルやコ
ンサートの映像が残されている。

1972年から77年、シュトゥットガルト放送交
響楽団の首席指揮者。1973年～75年、フランス

国立放送管弦楽団の首席アドヴァイザーとなる。
1978年にはマインツ大学の博士の称号を得、1992
年まで年に4週間、音楽の現象学の講座を受け持つ。
1977、78年に読売日本交響楽団に客演。1979年
にはミュンヘン市およびミュンヘン・フィルハー
モニー管弦楽団の音楽総監督に就任。ミュンヘ
ン・フィルとは多くの海外公演を行い、日本には
1986年、1990年、1992年、1993年に訪れている。
1982-84年、ミュンヘンで指揮法のマスターク
ラスを指導。1984年、カーティス音楽院の学生オー
ケストラを指導、フィラデルフィアとニューヨーク
で演奏会を聞く。1985年からはミュンヘン高等
音楽院のオーケストラを定期的に指導。1987、88
年にはシユレスヴィヒ・ホルスタイン音楽祭の若
い音楽家たちを指導しヨーロッパ・ツアー。1992



年3月31日と4月1日、ドイツ共産国大統領の要請を受ける形で37年ぶりにベルリン・フィルの指揮台にたつ。

1982年11月、B・ミケランジェリをソリストに迎えて、ミュンヘンと東京で引退コンサートを行う。1985年にバリのスコラ・カンツルムのマスタークラスに復帰するが、体調を崩し、1986年6月のミュンヘンでのコンサートを指揮したのを最後に、8月14日世を去った。

フランス国立放送管弦楽団(フランス国立管弦楽団) *Orchestre national de l'ORTF* *(Orchestre national de France)*

フランス国立管弦楽団は、1934年にフランス・ラジオ放送(RDF)の専属オーケストラとして設立されたフランス国立放送管弦楽団(Orchestre national de la radiodiffusion Française)がその前身となっている。運営母体がフランス放送協会(ORTF)となった1964年に名称を一部変更したが、母体名が変わっただけで(Orchestre national de l'ORTF)組織そのものや日本語による表記は変わらない。その後、1975年にフランス放送協会の組織が分割されてオーケストラがラジオ・フランス(Radio France)に移管されたことに伴い、名称を「フランス国立管弦楽団(Orchestre national de France)」とした。

初代首席指揮者はデジレ=エミール・アンゲルブレシュト(1934-1946)、第2次大戦後はマニエール・ローザンター(1946-1950)、ロジェ・デゾルミエールが首席指揮者についていたが、デゾルミエールが麻痺性疾患で引退した後、アンゲルブレシュトが復帰(1951-1958)、アンゲルブレシ

トの事実上の引退に伴いモーリス・ル・ルーがその地位を引き継ぎ(1960-1968)、1968年から1974年にはジャン・マルティノンが首席指揮者の地位にあった。

1973年から首席客演指揮者の地位にあったセルジュ・チュリュビダッケは、オーケストラの名称がフランス国立管弦楽団となった1975年に初の音楽監督に就任したが1年足らずで辞任。その後音楽監督は空席のまま、ロリン・マゼールが1977年から首席客演指揮者を勤め、1988年に音楽監督に就任(1990年まで)、続いて1991年から2001年までシャルル・デュトワ、2002年から2008年まではクルト・マズアが音楽監督を務めた。2008年以降はダニエレ・ガッティがその地位に就いている(2016年まで)。

楽曲について

ブラームス：悲劇的序曲 二短調 作品81

ブラームスは同じ時期に対照的な性格の作品を作曲するという傾向があった。この「悲劇的序曲」(作品81)と前作の「大管弦楽序曲」(作品80)はその代表的な例としてしばしばあげられる。したがって、「悲劇的序曲」の作曲の経緯を語るには「大管弦楽序曲」の作曲経緯から始めなければならぬ。

それはブラームスが1879年に現ポーランドのブレスラウ大学(現ヴロツワフ大学)から名誉博士号の称号を贈られたことに始まる。当初、ブラームスは礼状だけで済ませるつもりだったが、ようだが、選考委員の一人から大学が返礼の作品を希望しているという旨を伝えられて作曲したのが「大管弦楽序曲」だった。ブラームスは、4つの学生歌を素材としてユモラスで快活な演奏会用序曲を作曲して、それを友人のライネック宛ての私信で「泣く序曲」と記しているが、それと対になる「泣く序曲」についても語っている。それがこの「悲劇的序曲」である。「この場合には、わたしは《悲劇的序曲》も作曲するという悲しい気分を理め合わせをしないではいられなかつた。(ライネック宛)。

作曲時期はブレスラウ大学から称号を得た翌年の1880年の夏、温泉保養地のバード・インシュルで作曲された。完成直後に2つの作品はピアノ連弾用に編曲され、9月13日のクララ・シューマンの誕生日に贈り、その日の夕方には2人で連弾している。

曲はタイトルどおり悲劇的な性格をもつ二短調で書かれている。学生歌を素材とした「大管弦楽序曲」とは対照的に、悲愴感のあふれる第1主題群と優美な第2主題という主題構成や動機の有機的な展開などソナタ形式を遵守しているようにみえるが、展開部と再現部が入れ子状に絡み合っているなど(後の第3交響曲の終楽章の先取り)、独自の構成をもっているのもこの作品の特徴の一つである。

・作曲：1880年夏

・初演：1880年12月26日、ウィーン楽友協会大ホール、ハンス・リヒター指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第5番 変ホ長調 作品73(皇帝)

ピアノ協奏曲第5番《皇帝》は、1809年、ベートーヴェンが38歳のときに完成させた、当時としては破格の規模をもったピアノ協奏曲。

20代後半から激しい難聴に苦しめられ、1802年には有名な「ハイリゲンシュタットの遺書」を書いたベートーヴェンだったが、彼はその苦悩を自らの芸術の理念のために乗り越えるべき障礙としてとらえ、その後の壮年期には、後世に「傑作の森」といわれるほど重要な作品群を次々に創作していくことになる。この時期に特徴的なのは、協奏曲の分野に重要な作品が多いことで、1802年以降、ベートーヴェンはピアノ協奏曲第3番(1803年)、同第4番(1806年)、三重協奏曲(1805年)、ヴァイオリン協奏曲(1806年)と4曲の協奏曲を完成させている。ピアノ協奏曲第5番は、ベートーヴェンが完成させた

協奏曲のジャンルの最後を飾る作品で、この時期の創作意欲の高揚を反映させたきわめて独創的で力強い作品になっている（かなり年を隔てて1815年に第6番のピアノ協奏曲の作曲を試みているが、それはスケッチが残されているにすぎない）。

ベートーヴェンがこの作品の後、協奏曲のジャンルに意欲を持たなくなっただけではなく、ついでに、彼が個人的な苦悩を昇華していく過程で獲得した作曲理念が協奏曲というジャンルにそぐわないものであったことがもつとも大きいだろう。協奏曲は個人のヴィルトゥोजェンティに依存せざるをえず、作曲という行為によって作り上げられた作品＝世界の中ではそれは異質なものにならないからである。

第5番のピアノ協奏曲では「カデンツァは不要」と記し、それを独奏者に委ねる伝統的なスタイルをとらずに、ベートーヴェンの作品としての一貫性を保つようになっているのもその現れだろう。

第1楽章：アレグロ 変ホ長調 4/4 独奏協奏曲風ソナタ形式。

オーケストラによる変ホ長調の主和音に続いてピアノ音による華やかな分散和音が続くという独自の開始だが、その後は伝統的な協奏曲風ソナタ形式に従って、オーケストラによる主題提示部が続く。この部分は再現部でも再び現れるので、この楽章にいつそうスケールの大きな印象をもたらしている。

第2楽章：アダージョ・ウン・ポ・モッソ ロ長調 4/4 変奏曲形式（複合三部形式）

たおやかな響きが穏やかに広がる緩徐楽章。三部形式と変奏曲形式を併せ持った形式として

いるため、この穏やかな感情が最後まで続く。

第3楽章：ロンド、アレグロ・ビウ・アレグロ 変ホ長調 6/8 ロンド風ソナタ形式

第2楽章から切れ目なく続く華やかな終楽章。ピアノによる冒頭の独特なリズムカルなロンド旋律が何度も繰り返されるが、展開部にあたる部分をもちその最後で第2楽章の回想もされることから、ベートーヴェン自身もロンド形式とソナタ形式の融合を目論んだものだろう。

・作曲：1808-1809年

・初演：1811年11月28日、ライプツィヒ、ピアノ独奏：ヨハン・フリードリヒ・シュナイダー、

ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団（江森一夫）

